

絵本の読み聞かせを通しての交流 ～サブストーリーのある絵本を活かして～

杉本 翔平

【卒業論文目次】

第一章 はじめに	1
第一節 研究動機、目的	1
第一項 子ども観の転換	
第二項 子どもと社会的背景との関連	
第二節 研究方法	5
第二章 子どもの発達	6
第一節 子どもの心理的発達	6
第一項 自我の発達	
第二項 ピアジェ理論	
第三項 心の理論と二次的信念	
第二節 幼稚園教育要領と保育所保育指針	12
第一項 幼稚園と保育所の比較	
第二項 幼稚園教育要領「言葉」の領域	
第三項 保育所保育指針	
第二章 子どもの発達	
2 発達過程	
第三章 読み聞かせに伴う会話	17
第一節 読み聞かせとその特徴	17
第一項 読み聞かせの特徴	
第二項 読み聞かせの実践例	
第二節 予備調査の考察と仮説の提示	24
第一項 予備調査結果	
第二項 予備調査結果についての考察	
第三項 ストーリーがある絵本・ない絵本の読み方の違い	
第四項 サブストーリーのある絵本について	
第三節 家庭での読み聞かせの調査	27
第一項 家庭・幼稚園での読み聞かせの調査・観察方法	
第二項 調査結果をもとに全体を通して気付いたこと	
第三項 気付いたことについての考察	
第四項 会話に発展することによってふれているコメント	
第五項 絵・ストーリーに着目しているコメント	
第四節 幼稚園での読み聞かせとの違い	36
第一項 幼稚園での読み聞かせを観察して気付いたこと	
第二項 気付いたことについての考察	
第四章 今後求められる読み聞かせ	40
第一節 サブストーリーのある絵本の有効性	40
第五章 おわりに	42
第一節 研究成果のまとめ	42
第二節 今後の課題と展望	43
参考文献一覧	45
◇資料編	1～42

【各章の紹介】

第一章 はじめに

研究目的・動機としてなぜ幼児期の子どもを対象とするのかを社会的背景からその重要性を見てきた。調べていった結果分かったことがある。現代の日本社会において、女性の社会進出、少子高齢化の到来、国際化、情報化が指摘され、子どもの環境は複雑化している。ただでさえ都市化が進む現代においては、核家族化は人間関係の希薄化に拍車をかけている。このような閉鎖的な環境は子どもだけではなく、親である大人にも影響が出てくる。だから、人と人との間でコミュニケーションを取ることが重要となってくる。そういった人間関係をよくするきっかけに絵本の読み聞かせが有効なのではないかと考えられ、研究動機・目的として位置づけた。

研究方法としては、子どもの成長を心理学的に見ていながら、絵本の読み聞かせと結び付けていく。そして読み聞かせの特徴を整理して、それが子どもの成長に有効であることを確かめる。さらに家庭での読み聞かせを調査し、絵本と会話の関連性を検証する。その上で、有効な提案を行うとし研究方法とした。

第二章 子どもの発達

ここでは子ども、特に幼児の心理的発達についての概要を述べた。幼児期の子どもの成長はめざましく、心身ともに飛躍的に発達する。その発達を段階的に考察し、年齢別に特徴を挙げた。読み聞かせをするなかで、子どもは感じたことを発言したり、体で表現したりと何かしらの反応をする。そしてその反応は幼児期の子どもだからこそ発達段階によって異なると考えられる。それを自我の育ちとピアジェの発達段階説、心の理論と二次的信念という観点を中心に考察してきた。そして、幼稚園教育要領、保育所保育指針での子どもの捉え方を見てきた。これは子どもが絵本の読み聞かせをしてもらい際に、どこまで主人公の気持ちを考えることができるのかということや、客観的にストーリーを捉えることができるのかということ等を考察するためである。

・子どもの自我の発達

心理学で一般的に考えられている自我の成長を乳児期から4～5歳まで示した。

・ピアジェ理論

認知心理学者ピアジェの論に従い、子どもの行動と物事の捉え方をまとめた。

・心の理論と二次的信念

動物心理学者プレマックや心理学者パーナーによる理論をまとめ、子どもが複雑な事象や人間関係をどのように捉えられるようになるかを確かめた。

これらを前提に据えておくことで、第四章で今後求められる読み聞かせを考察する際に子どもの心理的発達を参考にしながら考察することができると考え、子どもの発達を見てきた。その結果、家庭での読み聞かせの調査結果を分析をする際や、サブストーリーの有効性を考える

際にうまく使えた。

第三章 読み聞かせに伴う会話

ここでは読み聞かせを中心に考察した。初めに、読み聞かせを定義し、その特徴をまとめた。次に予備調査を行い、絵本の特徴と会話との関係を考察し、それを基に家庭・幼稚園での読み聞かせの調査・観察を行った。家庭と幼稚園とで分ける理由は、読み聞かせをする状況が異なるためである。家庭での読み聞かせの場合、その多くが親（養育者）と子どもの一対一の関係である。幼稚園では一対一の読み聞かせもできるが、家庭とは違い集団での読み聞かせができる。そして両方の場合とも、読み聞かせを通して交わされるであろう、読み手と聞き手の会話などに注目する。そこに注目することで、読み聞かせからどんな広がりがあるかを調べる。今回は、家庭での読み聞かせを中心とし、いつ、どこで、誰が、どんな状況で、どんな絵本を読んだかなど、読み手（主に親）にこちらが用意する用紙に記入してもらった。そして絵本の種類によって会話の内容が異なってくると予想されるので、絵本のジャンルと会話の関連性を分析する。幼稚園では読み聞かせの様子を観察し、家庭での読み聞かせにおける会話との違いを考察する。そして読み聞かせを通して交わされる会話の違いを比較し、第四章へとつなげていく。

【卒業論文の一部（要約）】

◇第三章、第一節、第一項 読み聞かせの特徴

ここでは、波木井やよい『《読み聞かせ》ボランティア入門』（国土社、2006）、藤本英二『読み聞かせに始まる』（平文社、2004）、高山智津子・徳永麻里『絵本でひろがる子どものえがお』（チャイルド本社、2004）、矢島文夫『読み聞かせが子どもを救う』（埼玉新聞社、2003）を参考に以下の6点にまとめる。

- (1) 誰でも、いつでも、どこでもできる難しいものではない。
- (2) 擬似体験ができる。
- (3) 読み手と聞き手（大人と子ども）が本を通してふれ合う楽しさがあり、感情の交流がある。
- (4) 読み聞かせは大人をも成長させてくれるもの。
- (5) 想像力を豊かにする。
- (6) 本に対して興味を持たせる。

(1) 誰でも、いつでも、どこでもできる難しいものではない

読み聞かせは気軽にいつでも、どこでも、誰にでもできるものである。波木井は、「お昼の給食の時間、帰る前のほんのひととき、ちょっとした時間を見つけてやることができる。教室を飛び出して、校庭の木陰やプールサイドでも読んでもいいし、遠足のバスの中でだって読める」としている。それほど読み聞かせは場所を選ばず、自由なものなのである。

(2) 擬似体験ができる

読み聞かせでは、擬似体験ができるという特徴がある。話のなかでの自分を想像し、自己理解が進んだり、実生活における基礎になったりもする。そして読み聞かせで擬似体験をすることで、その体験を実際にやってみようとする契機になるはずである。

(3) 読み手と聞き手（大人と子ども）が本を通してふれ合う楽しさがあり、感情の交流がある。

読み聞かせでは、読み手と聞き手で会話などの交流がある。大人と子どもが本を間にはさんで笑い合ったり、子ども同士で気付いたことや感じたことを言い合ったりすると、そこには一体感や共生感が生まれる。

(4) 読み聞かせは大人をも成長させてくれるもの

仕事や子育てで時間的に余裕がない生活を送ることが多い現代でも、読み聞かせをするときだけは、わが子と向き合いゆったりとした時間を過ごすことができる。同時に、子どもが愛しくかけがえのない存在であることを再確認することもできる。そこに親子の間でコミュニケーションがうまく取れるようになり、絆がさらに強くなると思われる。つまり、読み聞かせは大人をも成長させてくれるものと考えられる。

(5) 想像力を豊かにする

絵本に出会っている子とそうでない子、しいては読み聞かせをしてもらった子と、そうでない子ではイメージの広がりが違う。言葉の引き出しがたくさんあれば、考える力も育つ。そこから豊かな想像へと変わっていく。

(6) 本に対する興味を持たせる

子どもとのスキンシップをはかるためにも、子どもを目の前にして絵本を読んであげることが大切である。そうやって親に読まれた経験はずっと記憶に残るはずだ。そしてその時にふれあった本というものに対して興味を持ち、自分の生活に取り入れていくようになるのではないかと考えられる。

第二章で示唆したように、絵本は子どもが周囲を意識し、人間関係を構築していくことに役立てられるものだと考えられる。(2)、(3)は第二章で心理学と絡めて挙げた二点の可能性と直接重なるものであり、(5)なども密接に関わっていると思われる。

◇第三章、第二節、第二項 予備調査の考察と仮説の揭示

これまで考察してきた絵本の効用を検証するために、まず予備調査を行う。この結果に基

づいて新たな仮説を立て、本調査につなげたいと考える。

(1) 予備調査結果

対象児 男児 (3歳半)

読んだ本 小賀野実・写真／斎藤陽子・編集『じどうしゃがいっぱい フォト絵本8』（小学館、2006）

読んだ時間 21：00～21：20頃（寝る前の20分位）

読んだ人 お母さん

会話 （※Hは男児の名前）

母「Hの好きな車はどーれだ？」

子「これー（スポーツカーを指す）」

母「お父さんの車はこの中にあるかな？」

子「これー（エルグランドを指す）」

母「残念！うちのは、こんな高級車ではないでーす。Hが乗りたい車はどれ？」

子「ショベルカー！ガガガって穴ほりたい！」

コメント

気の利いた会話もそんなにしてないし、そもそも読んであげてる私がすぐ眠くなるもんだから、この程度です。

(2) 考察

これは予備調査として3歳児の子どもを持つ母親に協力していただいて、読み聞かせの記録を取ってもらった。普段から、夜寝る前に絵本を読んでいると言っていた。このお母さんはパートの仕事をしているため、一日の多くを祖父母に子どもの面倒を見てもらっている。そのため、親子の時間はあまり多くないと言う。それは読み聞かせをやる時間帯とも関係しているだろう。

『じどうしゃがいっぱい』は乗用車から働く車まで載せられた写真メインの図鑑絵本である。会話の中では子どもの好みの車を親が尋ねたり、乗りたい車を聞いたりしている。子どもは「ショベルカー！ガガガって穴ほりたい！」と言っていて、自分なりの言葉で親に話している。こういった何気ない会話も、言葉の発達に関係してくると考えられる。人の話を聞き、自分の考えたことを相手に伝えることは、幼稚園教育要領の「言葉」の領域でも取り扱われている。また、自分の思いを単に表出するだけでなく、母親とのやりとりのなかで、自分の言葉を紡ぎ出している。つまり、絵本が会話を作り出す重要な道具となっていることが分かる。しかし、調査では図鑑絵本であったが、もし物語絵本などを読んでいたらどんな交流が生まれるだろうか。それぞれ特徴を、ストーリーがある絵本とない絵本という観点で比較したい。

(3) ストーリーがある絵本とない絵本での読み方の違い

ストーリーがある絵本	ストーリーがない絵本(今回は図鑑絵本)
<ul style="list-style-type: none"> ・話独自の世界・想像の世界に入る読み ・全体を見通す読み 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分に引き付ける読み ・本と切り離れた読み

ストーリーのある絵本を読むということは、そのストーリー独自の世界を味わう読みということである。つまり会話も、その絵本独自の世界に即した会話が交わされると予想される。しかも、自分一人で主人公が体験したであろう心理の追体験をするのもいいが、読み手と会話することで、さらに自分の読みが深まると考えられる。これは第二章で取り上げた「二次的信念」と関係してくる。

一方、ストーリーがない図鑑絵本のようなものは、自分と比較したり、自分だったらどうするかだったり、自分に引き付けた読みが大部分である。ストーリーのある絵本との違いは、個別に部分的に絵本を味わうことができることだ。ストーリーがある場合、頭から順に読んでいかななくては、そのストーリーを味わうことは難しい。このようにストーリーがある絵本とない絵本では読み方は異なるが、いろんな絵本にふれ、親しむことは必要である。なぜなら、そのことにより異なるタイプの会話がうまれ、さらに様々な交流につながるからである。

しかし、ストーリーのない絵本、しいては図鑑絵本に親しんでいる立場からすると、ストーリーのある絵本はその読み方にギャップが感じられるのではないだろうか。そこで、サブストーリーのある絵本が、双方をつなぐものとして有効に働くのではないかと考える。

(4) サブストーリーのある絵本について

サブストーリーについて指摘されている余郷祐次『絵本のひみつ』（徳島新聞販売店会、2008）では、

現在の高度な情報社会、とりわけインターネットの普及による情報の洪水とも言える、個人への情報の流れ込みという現実の中で、未来を生きる子どもたちには、情報の洪水に溺れることなく、意味ある情報をつかみだし、再編集し、創造的に発信することが求められます。もちろん、そんな能力の基礎となる脳のネットワークを形成するのが、絵本とその読み聞かせによって、高度な情報操作・情報処理・情報発信の基礎トレーニングそのものができる夢のような絵本があります。それは島田ゆかさんの「バムケロシリーズ」の絵本です。(中略)「バムケロシリーズ」には、物語展開に直接関係しない、ことばで語られることのないサブストーリーが複数展開しています。つまり、この語られることのない絵の物語を見つけ出し、自分で物語をつけて語り出すことによって、情報処理・発信能力が形成されるのです。

(引用・杉本 傍線は引用者による)

と述べている。「バムケロシリーズ」にはもちろんそれ自体にストーリーがあり、それだけでも十分楽しめる絵本である。サブストーリーは、話自体と関連するものもあれば、話とはまったく関係のないところで展開されているものもある。その例として第1作の『バムとケロのちに

ようび』(文溪堂、1994)を挙げる。

部屋には、海水浴をするバムとケロの絵が額に入って掛けられています。その絵は、4回登場しますが、4枚とも微妙に絵が違うのです。1枚目は、海の左に、サメのようなものが小さく見えています。2枚目は、それが右に移動し、やや大きくなっています。3枚目は、その黒いひれのようなのは真ん中に移動し、さらに大きくなっています。それから4枚目は、絵本緒最後に出てくるのですが、サメではなく、ペンギンが顔を出しています。

(引用・杉本)

この他にもサブストーリーはたくさんあり、サブストーリーはそれ自体にストーリーがあるものないものがある。つまり、サブストーリーにふれることは、上記で述べたストーリーのある絵本とない絵本の読み方のどちらの要素も含んでいることが分かる。その要素とはサブストーリーの世界を読むことと、図鑑絵本のように部分的に全体と切り離して読むことができるということである。故に、図鑑絵本のようにストーリーのない絵本に親しんできた子どもにとって、サブストーリーのある絵本は、ストーリーのある絵本を読むための橋渡しの役割があると考えられる。

予備調査の例と関わらせて考えると、『じどうしゃがいっぱい』のような図鑑絵本に親しんでいる子どもが、ストーリーのある絵本に親しむためには、例えば「パオちゃんシリーズ」が活用できると考えられる。「パオちゃんシリーズ」は『じどうしゃがいっぱい』と同じく、3・4歳を対象年齢とし、「バムケロシリーズ」程ではないがサブストーリーがある。そのサブストーリーに親しむことで、ストーリーのある絵本にも親しむことができると考える。

子どもが幼ければ、絵本はより単純で文の少ない絵本が多く読まれるだろう。子どもの好みによって図鑑絵本が大好きな子もいるだろうし、逆にストーリーのある絵本が大好きな子どももいるだろう。しかし、今まで述べてきたように様々な種類の絵本にふれることは大切なので、サブストーリーのある絵本を仲介にして、豊かな読みを広げていくことは必要だと考えられる。それに伴い、会話の内容も変わってくると予想される。

◇第三章、第三節、第一項 家庭・幼稚園での読み聞かせの調査・観察方法

岩手大学教育学部附属幼稚園の保護者全員(147名)を対象に、家庭での読み聞かせの記録を10日間取ってもらうようお願いした。その際、こちらで「読み聞かせカード」を用意し、①時間、②誰が読んだ(読み手)、③絵本名、④絵本は誰が選んだ、⑤状況、⑥お子さんのつぶやき・様子、⑦保護者の方の感想等(※⑦に関しましては、自由にお書きください。読み聞かせの時間以外でも、絵本の一部が普通の遊びや会話の中で見受けられたことあれば、そういった内容でも構いません。)を記入してもらう。これ以外は特別こちらからお願いはしておらず、体裁・分量は各家庭に任せている。記録を取る欄は全部で12個あり、調査期間よりも多く用意しているので、どのくらいの頻度で読み聞かせを行っているかも分かるようにした。今後求められる読み聞かせを考察するために、現代の家庭の読み聞かせの実態を把握することが重要となってくるので、今回このような調査をすることにした。尚、読み聞かせカードは資料に載せる。

また第四節の幼稚園との読み聞かせの違いを考察するため、同幼稚園で読み聞かせの観察も

行う。これは普段の読み聞かせの様子をビデオカメラで撮影し、観察するというものである。個人と集団での読み聞かせではその雰囲気や絵本の種類なども異なってくると予想される。そして集団での読み聞かせの場として幼稚園が最も身近であることから、幼稚園での読み聞かせの実態を観察することとした。

◇第三章、第三節、第五項 絵・ストーリーに着目しているコメント

ここでは特に、家庭での読み聞かせの調査で書かれたコメントを基に考察したものを紹介する。

●「子どもは絵を見ながら話を想像する。」

→自分でストーリーを作っている。

●「もうすぐ5歳になるのに、0～3歳用の絵を好むわが息子。ふと考えれば「絵本は絵を楽しむもの」であって、「文章が多すぎると絵に集中できないから」なのかも…と思いました。本人が好きな本を読んであげたいと思います。」

→絵に重点を置いている。

●「今日は〇〇が読んであげるから…」と言って読んでくれます。マイブームは、字のない、または絵だけの絵本です。意見し合いながら見るのですが、子の感性の鋭さ、豊かな想像力に驚かされます。」

→ストーリーのない絵本に親しんでいる。

●「絵本を自分で選べるようになってからは、リビングには図鑑やヒーローものなど、寝室には絵本だけの本棚と分けて置くようにしています。私の好み（明るいもの、ハッピーエンド、笑えるもの）で買ってくるので、絵本のないように偏りがあるのが少し気になります。でも、本が身近にあって、好きになってくれたらいずれは、自分で選ぶのだろうと思えば、今はそれでいいのかな～と思っています。」

→絵本のジャンルに偏りが見られている。

●「上の5歳の娘が本好きだったので、子どもなら誰でも読み聞かせを喜ぶのかと思っていたのですが、したの3歳の息子はあまり好きではないようです。自動車などの彼の興味のあるものなら見るのですが、強要するのめどうかと思うし、何か方法はあるのでしょうか？」

→自動車などのストーリーのない絵本に親しんでいる。

●「大人はあらすじの部分の絵しか見ませんが、子どもは話も聞き、絵も隅々まで見ていて、こちらが驚かされることがよくあります。」

→絵を細かく見ている。サブストーリーに気付ける、親しめる可能性ある。

●「最近を読んでいる途中で自分なりに結末を予想していることが感じられます。絵本は結末がはっきり完結しているので、親としては納得がいきますが、子どもとしては、自分の考えと

の「？」が残ることもあるようです。でもこれが子どもの想像力をたくましくさせるのだなと感じるこの頃です。」

→結末を想像する。サブストーリーのストーリーも想像できるのではないかな。

●「夜、絵本を開くとき、「はじまり、はじまり～」と親が言うと“待ってました！”とばかりに拍手し、ワクワクしている様子です。絵本選びもその日の楽しみです。親としては、文字の習得をしてほしい思いもあり、「自分で読んでね」と言ったりしましたが、子どもは、文字を追うより、じっくり絵を見ながらあれこれ想像をふくらませ、自分なりの世界を創造し、理解していこうとする様子を感じます。そして何より、「親に寄り添ってもらおう」ということに、子どもは安心感を覚え、至福の時を感じるのだな…と実感しています。」

→絵を見て想像する。

●「自分の好きな本を選ぶ＝良い事」⇔「ジャンルは広げてあげたい」「偏りたくない」

→絵本のジャンルは偏りたくない。

●「何度も同じ絵本を読んでいるのに新たに発見する事柄があるのもしばしばです。」

→よく絵を見ている。よく話を読んでいる。

●「読み聞かせはふれ合いになるし、絵を見て想像がふくらむし、とても良い経験になると思います。何回か読んだ本では、内容をきちんと覚えていて、最後のページのその後の続きを感想として話してくれます。大人になってからも本にふれてほしいです。」

→話の続きを想像する。

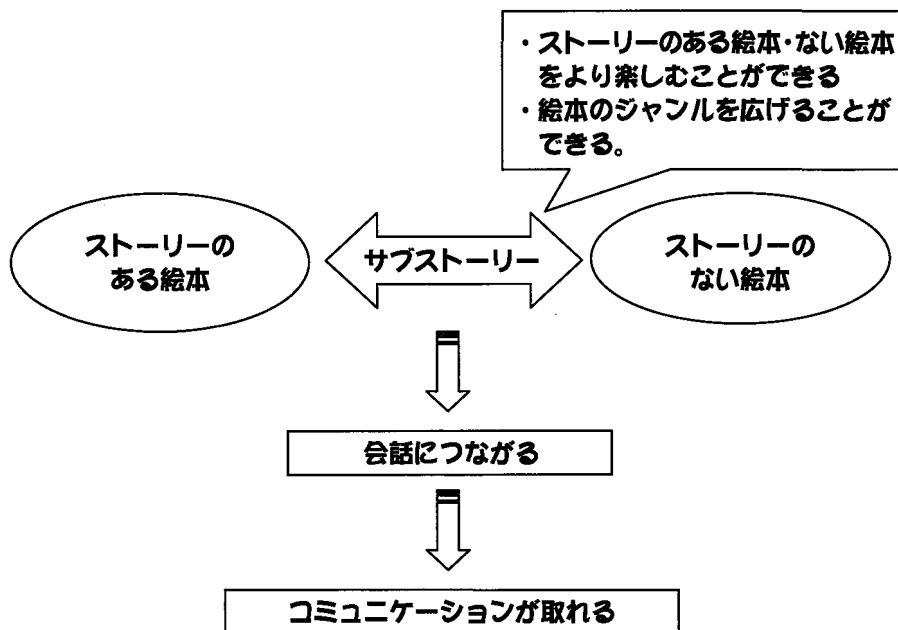
これらのコメントから、四つのことが分かる。①絵を見て想像する・絵を細かく見ている②話の続きなどのストーリーをつくる③ストーリーのない絵本（図鑑絵本など）に親しんでいる④絵本のジャンルは偏りたくないという親の希望、である。子どもは読んだ絵本だけのとどまらず、いろんなことを想像し、その想像の中で楽しむことがある。そしてそれを想像する感性に大人は驚かされる。しかし、子どもにはお気に入りの絵本や好きなジャンルの絵本というものがある。それに対して親が、いろんなジャンルにふれさせたいという願望がある。そこで、これらのことに対して、サブストーリーのある絵本が役立つのではないかと考える。

この第三章は本論文の中心を担うものとなった。一番の成果としては、読み聞かせカードに多くの家庭が読み聞かせの状況を細かく書いてくれたことで、家庭での読み聞かせの実態を予想よりも詳しく知ることができたことだ。そのため、いろんな視点から分析することができた。

第四章 今後求められる読み聞かせ

ここでは今後求められる読み聞かせについて、第三章、第三節・第四節で調査・観察した読み聞かせを基にサブストーリー（物語展開に直接関係しない、言葉で語られることのないもの）

のある絵本の有効性を考察した。



初めは、サブストーリーはストーリーのある絵本・ない絵本のどちらかに好みがある子どものために、両方の絵本を楽しむための架け橋になると考えていた。子どもによって、絵本の好みなどで読まれる絵本の傾向に偏りが生じると予想されたが、やはり読まれる絵本には偏りがあつた。親も偏りが無い方がよいということも分かった。しかし、実際子どもに好みはあるにせよ、いろんなジャンルの絵本を読んでいるということが実態であつた。そして、好みに偏りが無い子どもでも絵を細かく見ていることが分かった。つまり、サブストーリーはストーリーのある絵本・ない絵本の両者の架け橋にもなるが、サブストーリーというものの自体を楽しむこともできるのである。そのことで、今まで自分が親しんできた絵本をさらに楽しめるのではないと考えられる。

そしてサブストーリーのある絵本を活かし、絵本の読み聞かせを通して子どもと大人、子ども同士などの会話が生まれ、コミュニケーションを取るきっかけとなると思われる。したがって、サブストーリーのある絵本は有効的にはたらくと考えられる。

第五章 おわりに

本論文での課題としては、2点挙げられる。

まず一つ目は、第二章、第一節の子どもの心理的発達のところ、ヴィゴツキーの理論もおさえておきたかつたことだ。子どもの心理的発達として大まかに捉えてしまい、本論文と関連のある言葉や会話という視点で考察できなかつた。

二つ目は、絵本のジャンルと会話の関連性を分析する予定だつたが、その関連性をうまく抽

出ることができなかつたことだ。良い意味ではジャンルにとらわれないでいろんな絵本を読んでいることが分かったが、悪い意味ではあまりの読み聞かせカードの数にジャンルと会話を結び付けて分析することができなかつた。これは、家庭の読み聞かせの普段の様子を調べたかため、読み聞かせカードを自由に書いてもらったことが関係していると考えられる。こちらでもう少し書く内容を細かく指定しておけば、分析もスムーズにできたのではないかと思われる。

展望は、大学院の幼児教育コースに進学が決まっているので、大学院での研究の土台として本論文を活用していきたい。テーマとしては、現代の子育てにおける絵本の読み聞かせの意義として研究をしていきたいと考える。そこで、現段階の問題意識として(1)絵本はどんな機能をはたすのか、(2)子育て観によって絵本の選択にどのような違いがでるのか、ということを検討していきたい。今回の卒業論文の中での調査から、親の絵本に対する多様な考え方や捉え方があるということが分かった。そのことを踏まえ、子育てという視点も交えつつ絵本の読み聞かせの意義について考えていきたいと思う。

最後になりましたが、本論文を作成するにあたって、ご指導下さった小浦先生に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

【主要参考文献】

- 白川蓉子・稲垣由子・北野幸子・奥山登美子『育ちあう乳幼児教育保育』(有斐閣 2004)
- 高山智津子・徳永麻里『絵本でひろがる子どものえがお』(チャイルド本社 2004)
- 波木井やよい『《読み聞かせ》ボランティア入門』(国土社 2006)
- 藤本英二『読み聞かせに始まる』(平文社 2004)
- 文部科学省『幼稚園教育要領<平成20年告示>』(教育出版 2008)
- 矢寫丈夫『読み聞かせが子どもを救う』(埼玉新聞社 2003)
- 余郷祐次『絵本のヒミツ』(徳島新聞販売店会 2008)